

民俗文化

第29号 近畿大学民俗学研究所

2017-10



民俗文化

第二十九号



①熊野本宮大社

(田辺市本宮町本宮、2007年4月、藤井撮影)

旧社殿は熊野川の中州にあった。約3万平方メートルの広さがある。明治22年(1889)の大洪水で流されたため、現在の社地に遷された。

②熊野本宮大斎原

(田辺市本宮町高倉、2007年4月、藤井撮影)

熊野川の中州にあった熊野本宮大社の旧社地。



③八咫烏神事

(田辺市本宮町本宮、1995年1月、藤井撮影)

毎年正月に、牛玉神符に牛玉宝印を押捺する行事。熊野の牛玉宝印は文字をカラスでかたどっている。カラスは熊野の神の使いである。牛玉宝印は中世には起請文を書くために用いられた。

④湯の峰

(田辺市本宮町湯峯、2007年4月、藤井撮影)

本宮大社から一山越えたところに湯の峰温泉がある。つぼ湯は1日に7度、色が変わるといわれている。小栗判官はこの湯につかって、もとの姿に戻ったといわれている。





⑤ 瀨峡

(新宮市熊野川町、2007 年 4 月、藤井撮影)

熊野川町志古から瀨峡までジェット船が運航している。昭和初期にはすでに観光地となっていた。瀨峡は和歌山県・三重県・奈良県の県境に位置する。この上流には、周囲を三重県と奈良県に囲まれた、村全体が飛び地となっている北山村がある。

⑥ 熊野川

(新宮市熊野川町、2000 年 3 月、藤井撮影)

熊野川は熊野地方の大動脈であった。熊野詣の貴族たちは船で本宮から新宮へと向かった。地元の人々にとっては、生活の道として重要であった。人々は伝馬船で行き来し、ダンベ船で物資を運び、材木は筏で流した。写真は志古から音川付近を望む。対岸の三重県側には、三十三間堂棟木の伝説の伝わる楊枝薬師がある。



⑦ 篠尾の棚田と集落

(新宮市熊野川町篠尾、1998 年 8 月、藤井撮影)

定福寺から集落を見下ろした風景。棚田が広がっている。

⑧ 北山川沿いの集落

(新宮市熊野川町四滝、2007 年 4 月、藤井撮影)

熊野川・北山川流域はしばしば水害に襲われるため、一段高いところに避難用のアガリヤという小屋がある家も多い。





⑨ ダンベの鉤

(新宮市熊野川町宮井、1998年12月、藤井撮影)

昭和初期まではダンベと呼ばれる川船が通っていた。「ダンベはカワタケ（川沿い）の交通の主役だった」と語られるほど、熊野川流域の人々にとっては欠かすことのできない交通手段であった。ダンベは熊野川では、十津川村から新宮市までの間を行き来した。下りは炭・樽丸・シイタケなどを運び、帰りは食料品（米・酢・味噌・酒など）を運んだ。

⑩ ダンベの帆柱

(新宮市熊野川町宮井、1998年12月、藤井撮影)

ダンベは上るときには曳網で引っ張った。夏は帆をかけて上がれるので楽だったという。夏には南風（マゼ）が吹くため、帆に風を受けることができた。



⑪ コタカ網

(新宮市熊野川町宮井、2007年9月、藤井撮影)

旧熊野川町で最も盛んにおこなわれていた川漁はアユ漁であった。季節によって、さまざまな漁法があった。コタカ網は、浅瀬やセギを打ったところで投げて、アユを捕獲する。

⑫ アユ漁のセギ

(新宮市熊野川町相須、2007年9月、藤井撮影)

川幅いっぱいにアユを堰き止める杭を打ち、おもにオチアユを捕るときにセギ漁をおこなった。上流から下ってきたアユは、セギに止められて、行ったり来たりする。セギの下には白い石を敷き、アユの黒い影が通るとよく分かるようにしてある。アユが通ると、コタカ網を投げる。





⑬ズガニ

(新宮市熊野川町九重、2006年9月、藤井撮影)

モクスガニのことをズガニと呼んでいる。アユやウナギと同じ時期に下流に下ってくる。籠や網、モドリを仕掛けて捕る。



⑭稲を干す

(新宮市熊野川町東、2002年8月、藤井撮影)

熊野地方は、台風の通り道に当たるため、稲刈りが早い。



⑮茶摘み

(新宮市熊野川町九重、1999年5月1日、藤井撮影)

九重では茶の生産が盛んであった。茶のそばにコンニャク玉を植えるとよく育つという。かつては茶とコンニャクで生活できたという。

⑯ニホンミツバチの巣箱

(新宮市熊野川町九重、2012年7月、藤井撮影)

熊野地方では、江戸時代から養蜂がおこなわれており、江戸に出荷されていた。ミツバチの巣箱のことをゴウラと呼んでいる。スギの丸太などで作っている。集落の背後の山などにゴウラが設置されている。





⑰高菜を漬ける

(新宮市熊野川町鎌塚、2002 年 2 月、藤井撮影)

高菜を漬けて、ご飯に巻いて高菜寿司を作る。目を見開いて食べることから、めはりずしと呼ばれるが、鎌塚では高菜寿司と呼んでいる。

⑱なれずし

(新宮市熊野川町音川、1999 年 2 月、藤井撮影)

正月には各家庭で欠かせない食べ物であった。なれずしには 10 月ごろに捕ったアユを使う。アユをつぼ切りにして、20 日～1 か月、塩に漬ける。塩漬けたアユをご飯の上に載せて桶の中へ並べる。17～18 日寝かせてから食べる。なれずしは秋祭りにも供えることになっていた。昭和初期にはアユのなれずしが多かったが、最近ではサンマのなれずしが多くなっている。



⑲明治 22 年の水害の石碑

(新宮市熊野川町日足、2012 年 7 月、藤井撮影)

明治 22 年には本宮大社の社殿が流されるほどの洪水が起き、熊野川流域では甚大な被害が出た。写真は、ここまで水が来た、ということを示す石碑である。

⑳高倉神社の御神体

(新宮市熊野川町棕井、2000 年 4 月、藤井撮影)

熊野地方の神社では、丸石を御神体としている場合も多い。棕井の高倉神社は、日足の高倉神社に合併しようとして、御神体を持って行ったところ、「どえらいうなった」ので、よくないといって石を戻したという。





㉑門松

(新宮市熊野川町篠尾、1998年12月31日、藤井撮影)

写真の家では、オンマツ（雄松）・メンマツ（雌松）と榊・椎、椎の杭を立てる。根元にはヨツギサンと呼ばれる榎の木を4つに割ったものを立て掛ける。門松には注連縄を渡し、若葉・裏白・餅を包んだ紙・橙をつける。椎の杭はモチグイさんという、杭の上に雑煮などを供える。

㉒ホタサマ（再現）

(新宮市熊野川町東、2002年2月、藤井撮影)

大晦日の夜に、囲炉裏の火を絶やさず、新しい年に受け継ぐようにホダギを焚くという習俗がある。旧熊野川町では、この木をホタサマ・ヨツギサマなどという。榎の木を4本切ってきて、去年の榎と新しく切ってきた榎と一緒に焚く家もある。ゼニゴケがついた榎を切ってくるとよいという。



㉓七草粥行事

(新宮市熊野川町上長井、1999年1月7日、藤井撮影)

1月6日の晩に、すりこぎ・包丁・大きな飯杓子などの道具を持って、まな板の上の七草を叩いた。「七草、八草、トウトの鳥が日本に渡らん間に、かきよせひきよせ、がたがたがた」と言いながら叩いた。7日に七草粥を食べた。上長井では昭和50年ごろから、集会所で七草粥を振る舞う行事をおこなうようになり、写真当時は休校になった小口小学校でイベントとしておこなわれていた。右後ろにモチバナが飾られている。



㉔トウケマツリ

(新宮市熊野川町大山、2001年1月14日、藤井撮影)

米などを図る1斗入る斗桶（トウケ）という桶に、榊・榊・若葉・餅・みかん・柿を入れて、物置（籾を置いているところ）に祀る。椎の1本だけにモチバナをつけて祀っていた。12月30日ごろから祀り、1月15日までおいておく。



②⑤節分の玄関飾り

(新宮市熊野川町音川、1999年2月3日、藤井撮影)

玄関先にはオニノメツキ (アリドオシ)・オニカズラ・イワシの頭を挿す。

②⑥西敷屋・小山神社の祭り

(新宮市熊野川町西敷屋、2000年4月、藤井撮影)

熊野川を見下ろす高台に小山神社がある。かつては、敷屋村の村社であったので、旧本宮町高山・小津荷の人たちも祭りに来ていた。神事のあと、小山神社の前に広がる熊野川の川原において、餅撒きをおこなう。



②⑦秋葉さんの祭り

(新宮市熊野川町西敷屋、2001年1月15日、藤井撮影)

西敷屋集落背後の山頂に秋葉さんが祀られている。火伏の神である。和尚さんに拝んでもらい、餅撒きをする。山の上で餅撒きをするため、餅を担いで山へ上がる。

②⑧腹合わせて供えられたアユ

(新宮市熊野川町大山、1999年11月3日、藤井撮影)

旧熊野川町では、川の魚の代表はアユである。なれずしとして供えられることも多いが、生のままで供えられることもある。





②⑨ 盆の送り

(新宮市熊野川町玉置口、2001年8月16日、藤井撮影)

旧熊野川町では、盆には家ごとに川原に縦長の石を立てることが多い。石の前に供え物をして仏を送る。川から仏を迎える家もある。送るときには、弁当(団子など)、コノハナ(シキミ)などの花を持って川原に行き、石の前に並べる。線香やろうそくを焚き、家族が拜んで先祖を送る。

③⑩ 柱松

(新宮市熊野川町上長井、1999年8月14日、藤井撮影)

盆に10メートルほどのスギの木などを川原に立て、下から松明を投げ上げて、柱の上につけた籠に点火する行事。



③⑪ 盆のショウロウ(精霊) 船作り

(新宮市熊野川町上長井、1999年8月、藤井撮影)

初盆の家ではショウロウ船を作って川に流す。丸太を数本組んで、側面を麦藁で作る。近年では麦を作らなくなったため、稲藁で作っている。

③⑫ 盆のショウロウ船送り

(新宮市熊野川町上長井、1999年8月、藤井撮影)

船底、側面ともにベニヤ板で作る家もみられる。船はヒトセ(一瀬)ぐらいしか下らないが、「ヒトセを下さなあかん」といって、次の瀬まで泳いでついていくこともあった。



③月見に立てる竿

(新宮市熊野川町島津、2000 年 4 月、藤井撮影)

旧熊野川町では、旧暦 8 月 15 日の月見に、十字の竹串にサトイモやサツマイモを刺し、これを竹竿の先に取り付けて高く掲げる習俗がある。島津ではマイモ(サトイモ)を 4 つ刺した。写真の家では 2000 年当時もおこなっていたが、聞き取り調査の際に再現していただいた。



③④熊野速玉大社

(新宮市新宮、2005 年 5 月、藤井撮影)

熊野三山のひとつ。熊野川河口付近に鎮座する。境内には御神木である榊の大木がある。



③⑤御船祭

(新宮市、1972 年 10 月、渡辺撮影)

熊野速玉大社の例大祭。10 月 14 日から 16 日にかけておこなわれる。初日は阿須賀神社への神馬渡御式と熊野川の川原でおこなわれる神事がある。本祭は乙基河原への水上神幸と早船の競争がおこなわれる。水上神幸は鵜殿船での踊りに始まり、氏子地区の早船 9 艘を先頭に、神幸船が諸手船を曳いて御幸島へ向かい島を巡る。川原での神事のあと、早船は新宮川原を目指して競争する。



③⑥御船祭

(新宮市、1972 年 10 月、渡辺撮影)

ーツ物。



③7 阿須賀神社

(新宮市阿須賀町、2016年12月、網撮影)

後方に蓬萊山が聳える。『熊野社記』では熊野大神は神蔵峯から阿須賀森に移ったという。

③8 神蔵神社とゴトビキ岩

(新宮市神倉町、2016年12月、網撮影)

ゴトビキ岩は神の依代であり、熊野大神が降り立った霊所である。



③9 神倉神社より見た新宮の街並み

(新宮市神倉町、2016年12月、網撮影)

熊野川河口の手前に見えるこんもりとした山は阿須賀神社の蓬萊山。

④0 御燈祭

(新宮市神倉町、2016年2月、網撮影)

毎年2月6日に神倉神社で行われる迎え火の神事。神の山が火に包まれる幻想的な世界である。





④徐福の墓

(新宮市徐福、2004 年 8 月、藤井撮影)

秦の始皇帝の命を受けて薬草を探しに来た徐福の墓。紀州初代藩主の徳川頼宣が建てさせたという言い伝えがある。

④2那智丹敷浦の浜辺

(那智勝浦町浜ノ宮、2017 年 2 月、網撮影)

古代の人々はこの海の彼方に「常世」をみていた。また、観音浄土への憧憬から補陀落渡海が行われる場所でもあった。



④3熊野那智山遠景

(那智勝浦町那智山、2017 年 2 月、網撮影)

熊野三山の中で仏教との習合が最も早く進んだ場所である。山の山腹に那智大社と青渡岸寺が並び、右手には那智大滝がみえる。

④4熊野那智大社の社殿

(那智勝浦町那智山、2017 年 2 月、網撮影)

熊野夫須美神を主神として祀るが、速玉大社や本宮大社よりも創建が遅れる。





④5 青岸渡寺

(那智勝浦町那智山、2004 年 6 月、藤井撮影)

那智大社の隣に位置する。神仏分離以前は、観音を祀る如意輪堂といわれた。西国三十三所観音霊場の第一番札所。右奥に那智の滝が見える。本堂の左手前には「魚霊供養塔」が建っている。

④6 熊野飛瀧神社

(那智勝浦町那智山、2017 年 2 月、網撮影)

大己貴命を祀るが、那智大滝が御神体である。



④7 那智大滝

(那智勝浦町那智山、2017 年 2 月、網撮影)

那智大滝は妙法山へ登る誤と深斎の場所であり、花山院が滝籠行を行い神龍から三種の神宝を得たと伝えられる。

④8 那智の火祭り

(那智勝浦町那智山、1997 年 7 月、渡辺撮影)

熊野那智大社の例大祭で、扇祭りとも呼ばれる。本社の神前で大和舞・田楽舞・田植舞が奉納されたあと、12 体の扇神輿が本社から別宮の飛瀧神社へ渡御する。飛瀧神社のほうからは 12 本の大松明が登ってきて扇神輿を清める。大松明は扇神輿を先導するように滝へと進む。扇神輿は滝の前に並べられ、神事がおこなわれる。





④9 那智の田楽

(那智勝浦町那智山、1997年7月、渡辺撮影)

那智の田楽は、昭和51年(1976)に国指定重要無形民俗文化財、平成24年(2012)にはユネスコの無形文化遺産に登録された。田楽の道具は、昭和40年(1965)に県指定有形民俗文化財になっている。

⑤0 妙法山阿弥陀寺

(那智勝浦町南平野、2017年2月、網撮影)

妙法山は古代において山林修行の中心となった山であり、後世には死者の幽魂が参詣する山と信じられていた。



⑤1 妙法山奥ノ院参道

(那智勝浦町南平野、2017年2月、網撮影)

阿弥陀寺の奥ノ院には現在でも釈迦如来像が祀られており、ここが法華経誦持の行場であったことを伝える。

⑤2 漁協スーパー

(太地町太地、1997年7月、藤井撮影)

太地は古式捕鯨の発祥地である。江戸初期に網掛けをし、鉈で突き捕る方法確立し、各地に伝わった。太地の捕鯨文化は、平成28年(2016)、日本遺産「鯨とともに生きる」に認定された。





⑤③河内祭

(串本町、1993年7月25日、渡辺撮影)

古座川下流域の5地区が同じ日に、同じ場所で開催される。河口から2キロほど上流の「河内様（コオッタマ）」と呼ばれる川中の小島を御神体としている。島の対岸の川原で神事をおこなう。古座の漁民は大漁などを願い、宇津木の農民は豊作などを祈る。宵宮では古座から3艘の御船が河内様に向かい、夜籠りに入る。この祭りは、源平合戦で源氏に味方した熊野水軍の戦勝祈願や凱旋報告の名残とも伝えられる。河内祭は県指定無形民俗文化財となっている。

⑤④ショウロウ

(2003年7月25日、藤井撮影)

古座の小学生から、男童2人と女童1人が選ばれる。3名はショウロウと呼ばれる。祭りが終わるまで地面に足をつけてはいけないといい、橋があるところは上陸し、大人に担がれていく。河内様の対岸の川原のショウロウザに海に向かって座る。ショウロウは龍神の化身などといわれ、人々は童に向かって手を合わせる。



⑤⑤屋形船から権伝馬を見る

(2003年7月25日、藤井撮影)

漁師町の古座からは、屋形船に乗って人々は河内様の対岸へと向かう。この川原で神事がおこなわれる。5つの地区ごとに祭壇が設けられている。神事のあと、獅子舞が奉納される。島の周辺では権伝馬もおこなわれる。人々は屋形船から見物する。



⑤⑥竹筒

(古座川町宇津木、2003年7月25日、藤井撮影)

宇津木では、祭りの2日ほど前までに代表の人が海岸まで行って、塩水と海藻を採ってくる。河内様の東側の岸に宇津木の祭壇がある。竹筒に塩水を入れ、海藻を掛け、灯籠などに吊るす。これを潮筒と呼んでいる。各家にも塩水と海藻を分ける。



⑤7 河内祭りに供えられたトビウオ
(2003 年 7 月 25 日、藤井撮影)

⑤8 漁船から潮岬を望む

(串本町、2005 年 5 月、藤井撮影)

潮岬は本州最南端になる。沿岸近くを黒潮が流れるため、江戸時代からカツオ漁などが盛んであった。潮岬の下は、アカウミガメが集まるといい、昭和初期までは周辺の漁民がカメ突きに集まった。



⑤9 潮岬神社の御弓式

(串本町潮岬、1995 年 1 月 2 日、藤井撮影)

高校生ぐらいの男子 2 人が弓頭となって弓を射る。小学生の男子 2 人が矢取りとなり、放たれた矢を拾う。

⑥0 潮岬から串本の町を望む

(串本町潮岬、2015 年 2 月、藤井撮影)

潮岬はもともと島であったが、砂が堆積して砂州ができ、陸地とつながった。砂州の上に串本の町ができています。後方には橋杭岩が見える。





⑥1 巡航船

(串本町、1997年8月、藤井撮影)

紀伊大島には大島・須江・檜野という3つの集落がある。串本と大島の間をフェリーが通っていた。「ここは串本向かいは大島仲をとりもつ巡航船」と串本節に歌われた。平成11年(1999)9月8日にくしもと大橋が開通したことでフェリーは廃止された。

⑥2 周参見の港と稲積島

(すさみ町周参見、2016年3月、藤井撮影)

周参見はカツオのケンケン漁が盛んである。周参見の港の入り口に稲積島がある。この島は、神武東征の折、食糧の稲をこの島に積み上げたことからその名が付けられたという伝説がある。山王王子神社の社叢であったため良質な照葉樹林(ウバメガシ・スダジイなど)が全島を覆っている。



⑥3 日置の町

(白浜町日置、2003年9月、藤井撮影)

日置川河口に位置する日置は、上流から山の産物が集積される町であった。とくに、明治時代から製材業が発達し、材木を大阪や東京に運び出す機帆船の船員の町としてにぎわった。

⑥4 御船祭

(白浜町日置、2000年10月17日、藤井撮影)

日置の日出神社では、10月17日を中心にして秋祭りがおこなわれる。御船が中心となる祭りであるため、この祭りは御船祭りと呼ばれている。17日には御船を神社から浜まで担いで行く。御船は海へ入り、シオカケをおこなう。海から上がった御船は浜に設置された御旅所に安置される。神事がおこなわれ、獅子舞が奉納されたあと、御船は神社へ帰る。





⑥5 市江港

(白浜町日置（市江）、2000年10月、藤井撮影)

船の右側にはエビ網を干す棚が見える。集落を見下ろす高台には市江地蔵がある。この地蔵は海から上がったといい、航海の守り神や大漁の神として、船乗りや漁民の信仰を集めていた。

⑥6 埋め墓

(白浜町田野井（追ヶ芝）、2004年2月、藤井撮影)

旧日置川町周辺には両墓制が点在していた。とくに、田野井などの日置川下流域には焼骨改葬型両墓制が存在した。これは、遺体を埋葬後、10年ほどすると骨を掘り出し、骨を焼いたうえで、あらためて骨を墓へ納める、というものである。



⑥7 盆棚

(白浜町日置（市江）、2001年8月、藤井撮影)

旧日置川町では、新仏の棚と旧仏の棚を作る場合がある。写真の家では、旧仏の棚を毎年作っている。新仏の棚の横幅を広くし、旧仏の棚と一緒にしている。オサヤ（屋形）の中に紙の旗、戒名の札をおく。かつてはオサヤがなかったので紙旗をもたせかけて上へ帽子をかぶせた。

⑥8 盆の送り

(白浜町日置、2001年8月15日、藤井撮影)

フルボトケ（先祖）の場合は、鉦を叩いて浜まで行き、浜に花を立て、線香と松明を焚いて送る。新仏の場合には、ショウロウ（精霊）船を作って浜から流す。昭和30年代後半からは、日置の精霊船は家ごとではなく、共同になった。





⑥9 平田船

(白浜町田野井、2004年2月、藤井撮影)

日置川では川船のことをヒダラ（平田）といい、川船の仕事をする人をヒダラヒキ（平田曳き）といった。上流から河口の日置へ運ぶものは木炭・シイタケ・茶など、日置から上流へ運ぶものとしては米・酒・味噌・醤油・塩・砂糖・日用品などがあった。

⑦0 炭焼き窯

(白浜町安居、2001年11月、藤井撮影)

日高郡・西牟婁郡では炭焼きが盛んであった。ウバメガシを用いて備長炭を焼くこともあった。日置川流域では、田辺市芳養や日高郡の人たちが来て、炭を焼くことが多かった。写真は大型化した窯。



⑦1 獅子舞

(白浜町寺山、2001年11月3日、藤井撮影)

寺山の家々を獅子舞が回っている。ジゲマワシという。

⑦2 祭りのヤドに安置された獅子頭

(白浜町市鹿野、2001年11月3日、藤井撮影)

山間部に位置する市鹿野は、日置川上流や支流沿いの地域から産出される木材や木炭が集積される地域で、「山家なれども市鹿野都、二十五村を引き受けて」と歌われるほど山間部の中心的集落としてにぎわっていた。市鹿野の熊野十二神社の秋祭りでは、シシヤマ（イノシシ猟）の豊猟を祈り、祭りのヤドの祭壇に鉄砲を並べた。現在では、獅子頭と供え物などが並べられている。





⑦③ 大辺路

(白浜町安居、2004 年 4 月、藤井撮影)

熊野地方の沿岸部には、大辺路が通っていた。写真は、日置川中流域の安居より富田方面を望んだ風景。

⑦④ 鹿島神社の常夜灯

(白浜町富田中村、2016 年 11 月、胡桃沢撮影)

「金毘羅大権現」と刻まれている。文政 2 年。



⑦⑤ 墓地に積み重ねられた墓石

(白浜町富田中村、2016 年 11 月、胡桃沢撮影)

⑦⑥ 富田川と日神社の森

(白浜町十九淵、2014 年 5 月、藤井撮影)

日神社には、宝永 4 年 (1707) 10 月 4 日、和歌山県南部を襲った宝永地震による被害を克明に伝えている津波警告板が伝わる。後世の人に伝えるため、村人が寺の住職に依頼して、地震・津波の状況を記したものである。この警告板は和歌山県指定の有形民俗文化財になっている。





⑦特急くろしお 13 号オーシャンアロー新宮行
(白浜町、2016 年 11 月、胡桃沢撮影)
紀伊富田駅。

⑦⑧中辺路滝尻王子

(田辺市中辺路町、2016 年 12 月、網撮影)

熊野参詣道に祀られた九十九王子の一つ。熊野三山の入口にあたり、参詣者はここで垢離の儀礼を行ったという。



⑦⑧中辺路古道

(田辺市中辺路町、2016 年 12 月、網撮影)

熊野参詣のため、人々は急峻な険しい山道を越えていった。

⑧⑩清姫の墓

(田辺市中辺路町真砂、2016 年 3 月、藤井撮影)

田辺市中心部から上富田町に至り、富田川をさかのぼると、滝尻王子の手前に真砂の里がある。清姫が生まれた真砂の里に、清姫の墓といわれる墓石がある。真砂は中辺路沿いの集落である。清姫の墓の右隣りには薬師堂がある。薬師堂には、耳の病氣平癒を祈願し、治った人が供えるという穴の開いた耳石が吊り下げられている。





⑧1 関鶏神社

(田辺市東陽、1997年5月、藤井撮影)

熊野三山の別宮的な存在。源平合戦のとき、熊野別当湛増は源氏と平氏のどちらにつくかを、この神社において関鶏をおこなって占ったという。平成28年(2016)、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に追加登録された。

⑧2 田辺湾と神島

(田辺市、2016年11月、胡桃沢撮影)

右手が神島。南方熊楠が保護運動をおこなった。



⑧3 南方熊楠の旧宅

(田辺市中屋敷町、2015年8月、藤井撮影)

博物学者の南方熊楠(1867-1941)は和歌山市に生まれたが、イギリス・アメリカ遊学後の明治37年から田辺に定住し、人生の半分以上を田辺で過ごした。最晩年に暮らした旧宅は保存・公開されている。旧宅の隣に南方熊楠顕彰館を設置し、熊楠についての研究・情報発信をおこなっている。

⑧4 田辺城水門跡

(田辺市、2016年11月、胡桃沢撮影)

江戸時代、田辺領は安藤氏、新宮領は水野氏が治めており、支藩的な存在であった。





⑧5 田辺祭

(田辺市、1979年7月、渡辺撮影)

閏鶏神社の例大祭。7月24・25日におこなわれる。宵宮は神輿が7町内8基の笠鉦をしたがえて江川浦の御旅所に渡御し、潮垢離神事ののち神社へ還御する。笠鉦は町内を一巡してから神社へ帰る。本祭では、各町の笠鉦が旧田辺大橋の東詰めに集合し、清め式ののちに町内を巡行する。

⑧6 亀踊り

(田辺市湊(磯間)、1997年8月16日、藤井撮影)

文里の浜で、漁師が犬に噛まれて死んだウミガメを見つけ、カメを覚照寺に運び葬った。磯間では、大津波の被害を受けなかったのはカメのおかげであると言伝えられる。明治時代に「霊亀塚」の石碑を建て、現在でも盆にウミガメの供養のために亀踊りをしている。



⑧7 三栖廃寺塔跡

(田辺市下三栖町、2016年12月、網撮影)

紀伊国牟婁郡で唯一造営された古代寺院。瓦積基壇をもつ塔跡が発見され、現在は史跡公園として整備されている。

⑧8 三栖廃寺出土軒丸瓦

(田辺市東陽町、2017年2月、網撮影)

田辺市教育委員会に所蔵されている三栖廃寺出土の軒丸瓦。四重弧文軒平瓦や凸面布目平瓦と同様に、伊都郡かつらぎ町の佐野廃寺と共通する属性をもつ。





⑧9 三栖廃寺出土軒平瓦

(田辺市東陽町、2017年2月、網撮影)

四重弧文軒平瓦で、側面を剣菱形に削る。飛鳥川原寺に瓦を供給した五條市荒坂瓦窯の重弧文と製作技法が類似する。

⑨0 三栖廃寺出土凸面布目平瓦

(田辺市東陽町、2017年2月、網撮影)

四重弧文軒平瓦とともに荒坂瓦窯で特徴的な平瓦である。荒坂瓦窯の工人系列が造営に関わったことを示唆する。



⑨1 梅林

(みなべ町晩稲、2017年8月、藤井撮影)

みなべ町周辺では、江戸時代から梅の栽培がおこなわれていた。明治時代には梅干の需要が拡大して栽培面積が増加した。昭和20年代になると優良品種の選抜・育成がおこなわれ、最高級品種として南高梅の栽培が広がった。昭和30年代以降には健康食品ブームなどにより、梅干のほかジャムやジュースなどに加工されるようになった。平成27年(2015)に「みなべ・田辺の梅システム」が世界農業遺産に登録された。これは、薪炭林を残しつつ山の斜面に梅を栽培することで水源涵養や崩落防止の役割を果たしていることと、梅の受粉にニホンミツバチを利用して里山の自然環境が保全されていること、などが評価されたためであった。

⑨2 龍神温泉

(田辺市龍神村龍神、2015年8月、藤井撮影)

日高川沿いにある。江戸時代には紀伊藩主も龍神温泉に入ったという。





⑨③ 印南漁港

(印南町印南、2017年8月、藤井撮影)

印南は鯉節の発祥の地といわれる。江戸時代に、印南の漁民が土佐に出漁した際、鯉節を考案したという。漁港近くには、カツオ節始祖の角屋甚太郎、枕崎に製法を伝授した森弥兵衛、房総・伊豆に製法を伝授した印南与市の顕彰碑が立ち、「かつお節発祥之地」の看板が立っている。

⑨④ 道成寺縁起絵巻

(日高川町鐘巻、2000年、渡辺撮影)

大宝元年(701)創建と伝わる。清姫が安珍を追いかけて、龍の姿になって日高川を渡り、たどり着いたのが道成寺であった。釣鐘に隠れた安珍を清姫は焼き殺してしまう。その後、住職は二人の霊を供養する。道成寺では安珍清姫の絵巻の絵解きをおこなっている。



⑨⑤ 本願寺日高別院

(御坊市御坊、1997年7月、藤井撮影)

天正年間、当地の豪族であった湯浅氏が坊舎を建立した。豊臣秀吉の紀州攻めにより坊舎は焼失した。浅野氏が紀伊藩主であった時代に日高坊舎が建立され、御坊さんと呼ばれるようになった。これが御坊の町の名の由来となった。

⑨⑥ 龍王神社のアコウ

(美浜町三尾、2000年10月、藤井撮影)

龍王神社の社叢はクロマツを含む暖帯樹林である。アコウは県指定天然記念物となっている。アコウは有田市が自生の北限である。





⑨7 クエ祭りの神饌

(日高町阿尾、2000 年 10 月 18 日、藤井撮影)

阿尾の氏神である白髭神社の秋祭りのことを、通称、クエ祭りと呼んでいる。浜から神社までクエを棒につけて歩く。年配の人が早くクエを神社へ上げさせようとするが、若い衆がこれを阻止する。これだけのごちそうをして祭りをするからといって、琵琶湖のほうから神に来てもらったという。祭りにはカマスが 60 匹、イワシが 50 匹、フカ 2～3 匹、栗、柿（フユガキではため）などを供える。

⑨8 白崎海岸

(由良町大引、1997 年 7 月、藤井撮影)

白崎海岸の沖に浮かぶ岩礁は海驢島と呼ばれている。江戸時代にはアシカが生息しており、紀州藩主はアシカ狩りをおこなっていた。



⑨9 興国寺の天狗祭

(由良町門前、1994 年 1 月 15 日、藤井撮影)

鎌倉時代に創建されたが、正嘉 2 年（1258）心地覚心（法燈国師）が宗旨を禅宗に改め、以降は臨済宗法燈派の大本山として栄えた。村人は、天狗によって寺が再建されたと信じたと考えたという、境内の天狗堂では天狗祭がおこなわれている。

⑩0 広村堤防

(広川町広、2014 年 8 月、藤井撮影)

堤防は前後 2 列に並んでおり、前方の石堤は中世に畠山氏によって築かれたもので、後方の堤防は安政元年（1854）の大津波の後、地元の豪商・濱口梧陵が完成させたものである。安政元年の安政地震の際、濱口梧陵は稲藁に火をつけて人々を津波の被害から救ったという。梧陵は防災のみならず、復興事業の観点から堤防を築いた。





⑩① 醤油工場

(湯浅町湯浅、2014年8月、藤井撮影)

湯浅は熊野街道の宿場町として栄えた。鎌倉時代には、宋から帰った覚心が金山寺味噌を伝え、そこから醤油が生み出されたという。醤油作りの店などが立ち並んでいることから、平成18年(2006)には、重要伝統的建造物群保存地区に選定された。平成29年(2017)には「『最初の一滴』醤油醸造の発祥の地 紀州湯浅」が日本遺産に認定された。

⑩② みかんの苗

(有田市辻堂、2017年3月、藤井撮影)

紀州では江戸初期からみかん栽培が盛んとなり、江戸に販売する体制が整えられた。当時は紀州みかんという種のある品種であった。明治時代から温州みかんに切り替わっていった。紀州みかんは正月の飾りに使われている。



⑩③ 千田の秋祭り

(有田市、1976年10月、渡辺撮影)

⑩④ あらぎ島

(有田川町清水、2006年3月、藤井撮影)

棚田百選に選ばれている。2013年には周囲の景観とともに、「蘭島及び三田・清水の農山村景観」として国の重要文化的景観に指定された。





⑩⑤ 楮の皮

(有田川町清水、2006年3月、藤井撮影)

清水では江戸時代から保田紙を作っていた。和紙の原料となるのが楮である。

⑩⑥ 杉野原の御田

(有田川町、2000年2月、渡辺撮影)

高野山麓の杉野原にも御田が伝承されている。「田刈ったもれよー」と、太鼓に合わせて鎌で稲を刈る舞。



⑩⑦ 蛭子神社の常夜灯

(海南市下津町塩津、2016年10月、胡桃沢撮影)

享保5年。「回船安全」と刻まれている。

⑩⑧ 蛭子神社のお百度を数える道具

(海南市下津町塩津、2016年10月、胡桃沢撮影)

十度ごとに細木を右へ移し、すべて右寄せになると百度になる。





⑩長保寺本堂
(海南省下津町上、2016 年 10 月、胡桃沢撮影)
紀州徳川家の菩提寺。本堂は鎌倉時代、多宝塔は
南北朝時代の建立。

⑪善福院釈迦堂
(海南省下津町梅田、2016 年 10 月、胡桃沢撮影)
鎌倉時代の建立。



⑪加茂神社
(海南省下津町梅田、2016 年 10 月、胡桃沢撮影)



⑫紀文船出の地の石碑
(海南省下津町方、2016 年 10 月、胡桃沢撮影)



⑪⑨ みかんの運搬（再現）

（海南市下津町橋本、2010年2月、藤井撮影）

江戸時代以来、みかん畑は山の斜面に作られていた。平地の水田に作るようになったのは昭和30年代になってからである。収穫したみかんはオウコ（天秤棒）で担いで運んだ。

⑪⑭ みかんの蔵

（海南市下津町橋本、2010年2月、藤井撮影）

有田みかんに比べて、下津のみかんは味がすっぱいという。そのため、蔵に貯蔵して、有田みかんが市場になくなったところに出荷した。貯蔵することでみかんの甘みが増すという。



⑪⑮ 雨乞い踊り

（海南市下津町大窪、2014年10月、藤井撮影）

和歌山県では雨乞いの際には、高野山奥之院の火をもらってきて、山や川原で大きな火を焚くことが多かった。海南市や有田市ではヒアゲ（火上げ）と呼んでいる。大窪ではヒアゲのほか、笠踊りも踊った。

⑪⑯ タワシの製造

（海南市阪井、2012年2月、藤井撮影）

海南市では有田川町・紀美野町の山間部から購入したシュロの皮をタワシなどに加工して販売する店が多かった。1950年代から輸入のバームヤシを原料とするようになり、シュロのタワシなどを作っている店はごくわずかとなっている。





⑪ 藤白神社のクスノキ

(海南市藤白、2006年3月、藤井撮影)

熊野街道・藤白坂の麓に位置し、藤白王子の跡に鎮座する。藤代と書くこともあった。熊野街道沿いにある九九王子のなかでも、切目・稲葉根・滝尻・発心門王子とともに五体王子といわれる。京都から熊野を目指した人々は、藤白王子から熊野に入るという意識があった。境内にはクスノキの大木がある。南方熊楠は母親がこのクスノキに祈願して授かったため、「熊楠」という名をつけられたといわれる。



⑫ 藤白神社の獅子舞

(海南市藤白、2002年1月、藤井撮影)

建仁元年(1201)、後鳥羽上皇の熊野詣での際に、藤白王子において演じられたのが始まりという。県指定無形民俗文化財となっている。



⑬ 紀泉国境

(和歌山市滝畑、2001年1月、藤井撮影)

熊野街道が和泉国から紀伊国へ入る地点。和泉山脈を越え、紀ノ川を渡り、丘陵部を抜けると、藤白神社に至る。現在でも、府道・県道64号線、阪和自動車道、JR阪和線が並行して通っている。

⑭ 生石山から和歌山市中心部を望む

(2012年8月、藤井撮影)

海南市の南東部にそびえる標高800mの生石山からは、和歌山市から紀ノ川平野だけでなく、淡路島・紀淡海峡・四国まで望むことができる。和歌山市は紀ノ川河口部に開けた町である。写真中央の小高い丘の上に和歌山城がある。





⑫① 紀三井寺から和歌浦を望む
 (和歌山市紀三井寺、2000年4月、藤井撮影)
 紀三井寺は西国三十三所観音霊場の第二番札所。
 奈良時代に為光上人によって開かれたという。紀三井寺境内には桜が多いが、和歌山地方気象台指定の標本木(ソメイヨシノ)が本堂前にあることでも知られている。和歌浦は万葉集の時代から景勝地として知られており、平成29年(2017)、日本遺産「絶景の宝庫 和歌の浦」に認定された。

⑫② 和歌山藩台場の石垣
 (和歌山市雑賀崎、2016年10月、胡桃沢撮影)



⑫③ 雑賀崎の旧正月
 (和歌山市雑賀崎、2000年2月7日(旧暦1月3日)、藤井撮影)
 雑賀崎は江戸時代からの漁村である。ここでは旧正月をおこなっている。大晦日にお宮の神を自分の船に迎える。このとき、三方にお神酒・洗い米・カケノイオ(丸めて乾燥させた小さなタイ2匹)を載せてお宮(衣比須神社)から船に向かう。正月3が日は同じ供え物を持って船からお宮に行き、神さんを返す。

⑫④ シラスを干す
 (和歌山市新和歌浦、2016年10月、胡桃沢撮影)
 和歌山県北部ではシラス漁が盛んであり、シラスが名物となっている。





⑫5 友ヶ島

(和歌山市加太、2012年8月、藤井撮影)

友ヶ島とは地ノ島・虎島・神島・沖ノ島の総称。加太と淡路島の間に並んでいる。友ヶ島は葛城修験の霊場であった。戦時中は島全体が要塞として立ち入ることができなかった。軍の砲台跡などが残っており、現在では廃墟を目的に訪れる人が多くなっている。

⑫6 加太の港と集落

(和歌山市加太、2012年8月、藤井撮影)

加太は大阪湾の入り口にあたるため、古代から南海道の港として位置づけられ、中世には四国・九州のみならず明などとの交易船の停泊地として栄えた。現在では漁業が盛んで、京阪神などからの観光客でにぎわう。



⑫7 淡島神社

(和歌山市加太、2016年10月、胡桃沢撮影)

⑫8 和歌祭

(和歌山市、1996年5月、藤井撮影)

紀伊藩初代藩主となった徳川頼宣が和歌浦に東照社(東照宮)を造営して以来、家康の命日である4月17日に神輿渡御(和歌祭)がおこなわれるようになった。藩主も上覧する祭りで、和歌浦周辺の人々だけでなく、和歌山城下町の人々も参加する祭りであった。明治以降もおこなわれたが、第二次大戦中は中止された。昭和23年(1948)に商工祭の一環として復活し、平成14年(2002)には商工祭から独立して、和歌浦でおこなわれるようになった。写真は棒振。





⑫9 日前宮

(和歌山市秋月、2005 年 4 月、藤井撮影)

和歌山市の郊外に鎮座する。日前（ひのくま）神宮・国懸（くにかかす）神宮からなる。通称は日前宮（にちぜんぐう）。天照大神が天の岩戸に隠れた際、天照大神を慰めるために鏡を鑄造した。最初に鑄造した鏡を祀ったのが日前・国懸両神宮である。和歌山市では、日前宮・伊太祁曾神社・竈山神社の3社を参ることを三社参りという。戦時中にもこの三社参りがおこなわれており、現在でも正月に三社参りをする家もある。

⑬0 愛宕講の供え物

(和歌山市松島、2000 年 2 月 28 日、藤井撮影)

火伏の神として愛宕さんを祀っている。紅白の鏡餅とオシヌキ（ご飯を杵で押し抜いて作ったもの）を供える。餅の前に置かれているのがオシヌキ。



⑬1 墓の谷

(和歌山市直川、2000 年 1 月、藤井撮影)

和歌山脈のことを和歌山県では葛城山と呼んでいる。友ヶ島から始まり、和歌山脈一帯には修験の行場が点在している。墓の谷は、修験道の開祖である役行者とその母親を祀っている。役行者は若いころ、葛城山中で修行中に大病をし、母親の看病で全快したという。母親は息子の大成を願いながら、この地で没したという。役行者は妓楽・妓女の二鬼を使わして母親の霊を祀ったことから、墓の谷または、母の谷といわれる。母親の命日にあたる7日にはお参りが多い。戦争中は7日には数珠つなぎで参った。千本のぼりは、お願い事を書いて、成就するとお礼に立てる。今は病氣や受験の祈願が多い。

⑬2 トウヤ交代の行列

(和歌山市永穂、2000 年 2 月 20 日、藤井撮影)

和歌山市周辺でもかつては宮座があったが、現在でも続けているところは少なくなっている。永穂では旧正月の10日にオザ（御座）がおこなわれる。「永穂の御座か、貴志の大飯か」と呼ばれるほど盛大であったという。トウヤの家で拝み、食事をしたあと、次のトウヤに役を送る。





⑬ オヅキヨウカ

(和歌山市直川(畑)、2000年5月7日、藤井撮影)

旧暦4月8日に、家の前にツツジなどの花をつけた竿を高く立てるという習俗があった。和歌山県北部ではオヅキヨウカと呼ばれている。昭和20年代にはおこなわなくなった家が多く、現在でも続けている家はごくわずかである。写真の家では竹の先にウノハナ(ゴメゴメ)・ツツジをくくってあげている。

⑭ オヅキヨウカ

写真⑬に同じ。



⑮ 伊太祈曽神社の卯杖祭

(和歌山市伊太祈曽、1995年1月15日、藤井撮影)

小豆粥を炊き、その中に竹筒を入れる。竹筒ごとに粥の出来具合を見て、その年の稲の品種の豊作を占う。和歌山市東部・紀の川市西部の農民たちは、この日に伊太祈曽神社へ参った。山東参りと呼ばれている。

⑯ 伊太祈曽神社の木祭り

(和歌山市伊太祈曽、2003年4月6日、藤井撮影)

伊太祈曽神社は、全国を植林したというイソタケルノミコトを祀る。林業関係者が集まって木祭りをおこなっている。





⑬⑦ 光恩寺の開山忌

(和歌山市大垣内、2000年4月1日、藤井撮影)

光恩寺は、天正19年(1591)、三河国松平郷出身の信譽上人が開いた。毎年4月1日には、信譽の開山忌がおこなわれる。境内の無縁供養塔の前でも読経をおこない、その後、餅撒きをする。閏年には、菩薩の面をかぶって練り歩く「お渡り」、「お練り」という行事もあった。

⑬⑧ 光恩寺の杓

(和歌山市大垣内、1999年12月、藤井撮影)

光恩寺本堂の中には、杓が奉納されている。江戸初期、一人の老婆が竊になったとき、信譽が口授心伝の法によって治したという。そのお礼に杓を奉納するようになったという。病気の人や、カンの強い子は、本堂右端にある信譽の木像の前に杓を10日間置き、杓の裏に虚無僧の灸をすえ、治ったお礼として杓を長押に差す。光恩寺の住職になると、3回はこの杓で檀家を回り托鉢をしなければならないという。



⑬⑨ 生石山から岩出市付近を望む

(2012年8月、藤井撮影)

正応元年(1288)、覚鑊の弟子たちが高野山から根来に移って根来寺が誕生した。戦国時代には、宗教都市として発展する。根来寺の周辺は山あいまで坊舎で埋め尽くされた。豊臣秀吉の紀州攻めによって焼き尽くされたが、江戸時代に復興した。近年では根来寺周辺の山は大規模に削り取られ、戦国時代の宗教都市は全貌が調査されないまま、消滅してしまった部分も多い。

⑭⑩ あらかわの桃

(紀の川市桃山町元、2016年7月、藤井撮影)

旧桃山町の安楽川周辺では江戸時代から桃の栽培が始まり、明治時代以降に品種改良を重ね、現在では「あらかわの桃」の生産地として知られるようになった。毎年、7月～8月には市内各所にある桃の直売所に関西一円から大勢の人が訪れる。





⑭ 流し雛

(紀の川市粉河、2001年3月3日、藤井撮影)

毎年、3月3日におこなわれている。粉河寺で祈願祭をした後、紀ノ川の川原へ移動し、紙雛を紀ノ川へ流す。粉河寺の行事と深田地区の風市神社に伝わる風習を融合して、昭和57年(1982)から始まった。

⑫ 粉河祭り

(紀の川市粉河、1996年7月、藤井撮影)

粉河寺は奈良時代の創建と伝えられる。西国三十三所観音霊場の第三番札所。鎌倉時代作の「粉河寺縁起絵巻」が伝わる。粉河寺の裏山には粉河産土神社がある。この神社は粉河寺の鎮守社で、旧粉河村の総鎮守であった。粉河祭りはこの神社の祭礼で、文禄2年(1593)に起源をもつと伝えられる。粉河祭りの山車の髭籠は、神の依り代として折口信夫も注目した。



⑬ 柿の葉寿司

(紀の川市中鞆淵(咲林)、1999年8月、藤井撮影)

伊都郡と那賀郡東部では柿の葉寿司を作ることが多い。家ごとに盆や秋祭りに作っていた。

⑭ ドンドコドン

(紀の川市上鞆淵(久保)、2000年1月8日、藤井撮影)

村内の豊作・安全を祈願して年の初めにおこなうオコナイの行事である。久保ではドンドコドン、テラノウカ(寺の八日)と呼ばれている。各家からフクデと呼ばれるハゼの棒と鑓餅を持って集まり、寺の方向に向かって拝みながら、フクデで床を突く。牛玉宝印の札をもらってフクデに挟んで家に持ち帰り、これを舂蒔きのときに田の水口へ立てた。





⑬小正月

(紀の川市中鞆渕(湯ノ本)、2000年1月15日、藤井撮影)

1月15日の朝、正月飾りを取り外して箕に入れ、その上にカタツケバに載せた小豆粥を置く。カタツケバの葉には火を載せると型がつく。カタツケバという名称は、この葉に型をつけるということと、正月の片づけをするという意味の両方をかけているという。

⑭初午

(紀の川市下鞆渕、2000年3月13日、藤井撮影)

大善寺の餅撒き。伊勢音頭を歌いながら餅を担いで練り歩く。その後、櫓の上から餅を撒く。



⑮土葬の墓地

(紀の川市上鞆渕、1999年3月、藤井撮影)

和歌山県では昭和時代の末期まで土葬がおこなわれていたところも多かった。写真の埋葬地には鎌と六角塔婆が立てられている。

⑯新仏の棚

(紀の川市上鞆渕(清川)、1999年8月13日、藤井撮影)

高野山麓では、盆に新仏を祀る場合、軒下や縁側に棚を作る。この棚はソンジョダナなどと呼ばれている。竹を4本立て、屋形を作り、ヒバ(檜の葉)で覆い、中に経木などを置く。前にははしごを掛ける。近年ではこの形態の棚はほとんど見なくなり、葬儀屋が販売する祭壇を家の中に設置するケースが多くなっている。





⑭無縁仏の棚

(紀の川市中鞆淵(湯ノ本)、1999年8月13日、藤井撮影)

高野山麓では、盆に家ごとに無縁仏を祀ることが多い。無縁仏の祀り方は地域によってさまざまである。鞆淵では、竹を4本立てて棚を作る場合、竹を2本立てて棚を作る場合、写真のように竹を1本立てて祀る場合がある。上部に板を渡し、経木と供え物を置く。先を割って足にした竹筒を立て、花を挿す。花はキキョウ・カルカヤ・オミナエシ・ホウズキぐらいであったが、この年はキキョウ・カルカヤ・オミナエシ・キク・ミソハギ・ホウズキを立てている。



⑮仏迎え

(紀の川市平野、2014年8月8日、藤井撮影)

高野山麓一帯では、盆前に経木をもらうことで仏を迎えるところが多い。地域によって多少異なるが、経木には先祖・50年たっていない仏・新仏・三界万霊(無縁仏)・弘法大師のものがある。



⑯野上鉄道

(紀美野町下佐々、1980年2月、藤井撮影)

海南市の日方駅から旧野上町の登山口まで11.4kmを走っていた。大正5年(1916)に日方―野上間が開業、昭和3年(1928)に野上―生石口(のち登山口に改称)間が開業。野上谷のシュロ・ロープなどを運んでいたが、シュロ産業の衰退と、利用者の激減により、平成6年(1994)に廃止された。写真は登山口駅で撮影。

⑰小川の大般若

(紀美野町福井、1996年7月、藤井撮影)

大般若経600巻を転読する行事は県内各地に伝承されている。配られた般若の札は家の玄関先に貼ったり、竹に挟んで田んぼに挿した。写真は、紀美野町小川地区にある福井の安養寺で大般若の転読をおこなっているところである。現在この地区では、小川八幡神社で大般若経の虫干がおこなわれている。





⑬生石参り

(紀美野町、2012年8月16日、藤井撮影)

紀美野町西部では、集落の人たちがそろって盆過ぎに生石山に登り、櫻の枝を持ち帰る。

⑬生石参りの櫻

(紀美野町安井、2011年8月、藤井撮影)

持ち帰った櫻の枝は、水田に立てるか、家の玄関につける。風よけになるという。



⑬キリゾメ

(紀美野町滝ノ川、2013年1月、藤井撮影)

山の仕事始めとして、正月に何本かの木を切ってきて、家の隅に置いて祀ることをキリゾメという。ツクリゾメはおこなっている家もまだ多いが、キリゾメをおこなっている家は少なくなっている。

⑬餅撒き

(紀美野町国木原、2015年2月、藤井撮影)

和歌山県北部でも餅撒きは盛んにおこなわれる。写真は国木原の庚申の祭りでの餅撒き。集会所を出るときに、伊勢音頭を歌いながら、餅を担いで歩く。その後、集落の人々は庚申を祀っている山の上(ゴルフ場の一角)まで移動し、拝んだ後に餅撒きをする。





⑮ 盆踊り

(紀美野町毛原宮、2012年8月15日、藤井撮影)

⑯ 葬式の輿

(紀美野町西野、2013年9月、藤井撮影)

紀美野町では昭和60年ごろまで土葬がおこなわれていた。集落ごとに葬式の道具を持っている。写真は棺桶を運ぶための輿。



⑰ 井戸

(紀美野町滝ノ川、2013年1月、藤井撮影)

山に近い民家では、山から飲み水などの生活用水を引いている。

⑱ 水害の石碑

(紀美野町野中、2013年12月、藤井撮影)

昭和28年7月18日の水害では、紀美野町でも大きな被害が出た。この石碑は浸水最高地点を示すものである。十三神社境内に建っている。





⑩⑪ 榲桲

(紀美野町勝谷、2013年9月、藤井撮影)

榲桲の油はかつて高野山に年貢として納められたという。紀美野町には榲桲の木が何本か残っている。

⑩⑫ 榲桲の実

(紀美野町東野、2014年9月、藤井撮影)

榲桲の実はろうそくの原料として利用された。紀美野町では榲桲の実を販売し、海南市で加工された。



⑩⑬ 山椒の収穫

(紀美野町谷、2015年8月、藤井撮影)

紀美野町・有田川町では山椒の栽培が盛んである。

⑩⑭ シュロ

(紀美野町毛原中、2016年1月、藤井撮影)

紀美野町・有田川町ではシュロの皮などを販売することでかなりの収入源となっていた。皮は旧野上町や海南市でタワシ・縄・蓆などに加工された。





⑩イノシシ猟

(紀美野町毛原中、2015 年 1 月、藤井撮影)

イノシシ猟をおこなう日には、朝から手分けして山に入り、イノシシの足跡を確認する。これをミキリという。写真はミキリのあとの相談をしているところ。

⑪ズガニを捕る籠

(紀美野町蓑垣内、2014 年 1 月、藤井撮影)

和歌山県北部でもズガニを捕獲した。



⑫棚田

(紀美野町三尾川、2013 年 12 月、藤井撮影)

紀美野町では山の傾斜地を利用した棚田が点在している。

⑬牛の草鞋

(紀美野町滝ノ川、2013 年 1 月、藤井撮影)

昭和 30 年代までは農耕用の牛を各家で飼っていることが多かった。





⑩ 丹生都比売神社

(かつらぎ町上天野、2007 年 9 月、藤井撮影)

高野山の地主神で、御祭神は丹生明神・高野明神・氣比明神・巖島明神の四神である。空海が高野山を開く際、高野明神（狩場明神）が獵師の姿となり、白い犬と黒い犬を連れて現れ、空海を高野山へ導いたという。丹生都比売神社の鎮座する天野の里には、江戸時代までは高野山の僧侶の里坊が立ち並んでいた。平成 16 年（2004）、世界遺産に登録された。

⑪ 御田祭

(かつらぎ町上天野、2007 年 1 月、藤井撮影)

丹生都比売神社では、1 月に農作業の所作をして豊作祈願をする御田祭がおこなわれる。御田のときに授与される牛玉宝印の札は、各家で用意しておいた福杖に挟んでナリキゼメと初蒔きのときに用いた。



⑫ 節分の豆占い

(かつらぎ町下天野、2008 年 2 月、藤井撮影)

節分に、1 月、2 月、3 月と 12 ヶ月分として 12 個の豆を火鉢の上に並べ、焼け具合を見て占いをする。閏年には豆を 13 個並べる。豆が黒くなると、その月は雨が多い、豆が白いとその月は雨が少ないという。この結果は、1 月半黒などに紙に書いて貼っておく。



⑬ 田植え前に水口に立てられた札と花

(かつらぎ町下天野、2006 年 5 月、藤井撮影)

初蒔きの日に、田の水口へ、花と福杖を立てる。福杖には御田でもらった牛玉宝印の札を挟む。花はツバキ・ウメ・モモ・コメバナ（ユキヤナギ）などであった。現在ではこの習俗をおこなっている家はほとんどないため、再現していただいた。



⑬ タヅネサン

(かつらぎ町下天野、2006年5月、藤井撮影)

田植えの前に、苗を3把ほど家のカドに持ってきて祀った。これをタヅネサンという。供え物のごちそうを入れた重箱を真ん中にして苗を3把置いた。田植えにはタヅネから植えた。

⑭ ヒエボネ

(かつらぎ町上天野、2007年7月、藤井撮影)

山田の田には直接冷たい水が入らないように、石垣と田の間に水が流れるように溝を掘っていた。この溝と田の間の土手のことをヒエボネという。溝にはヒエモチを植えていた。



⑮ イノコの供え物

(かつらぎ町下天野、2007年12月、藤井撮影)

各家では収穫を感謝してイノコの供え物をした。写真は臼の上に箕を置いて祀っている。箕の上には餅12個(閏年には13個)・大根・柿12個(閏年には13個)・ご飯・ナンテン・ホガケを供える。

⑯ 吊るし柿

(かつらぎ町上天野、2007年12月、藤井撮影)

伊都郡では柿の栽培が盛んである。かつらぎ町四郷は正月用の串柿の産地である。四郷以外では、吊るし柿にして家庭で食用とする場合が多い。





⑪ 草葺きの民家

(かつらぎ町下天野、2007年9月、藤井撮影)

和歌山県北部では草葺きの民家は昭和中期ごろから急速になくなっていった。残っている家でも屋根の全面にトタンをかぶせている場合が多い。

⑫ ヘッツイサン

(かつらぎ町下天野、2007年5月、藤井撮影)

和歌山県北部では家の竈のことをヘッツイサンと呼ぶことが多い。写真はタイル貼りにした改良型の竈である。このような竈が残っている民家は少なくなっている。



⑬ 小田井用水路

(かつらぎ町妙寺、2016年8月、藤井撮影)



⑭ 鎌八幡

(かつらぎ町三谷、2006年8月、藤井撮影)

丹生酒殿神社の社殿の裏にある。もと、兄井村の氏神であったが、明治時代に三谷の丹生酒殿神社に合祀された。ご神体は鎌と熊手である。イチイの木に鎌を打ち付けて祈願する。



⑪引の池（上池）

（橋本市高野口町応其、2008 年 7 月、藤井撮影）

紀ノ川の河岸段丘上には、多数の溜池が存在する。この池は、南北朝以前に築造されていたが、地元では高野山の応其が天正 18 年（1590）に築造したと伝えている。江戸時代には下池を作っている。上池には 4 本の樋と底樋がある。田植え前には、樋を抜いて水田に水を入れる。この池の水が灌漑する水田は 200 町歩にも及んだ。昭和 20 年ごろまでは、秋に池の水を抜いてウナギなどの魚を捕った。毎年、7 月 1 日には池のほとりにある応其の供養碑の前で、応其上人祭がおこなわれている。

⑫小田井堰

（橋本市高野口町小田、2015 年 8 月、藤井撮影）

小田井は、宝永 4 年（1707）、紀伊藩主徳川吉宗の命により、大畑才蔵が完成させた。小田井堰から岩出市まで約 36km の用水である。2005 年には疎水百選に選ばれた。



⑬無縁仏

（橋本市向副、2016 年 8 月 13 日、藤井撮影）

高野山北麓では盆に祀る無縁仏の棚は、写真のような形態のことが多い。桶をひっくり返し、その上に経木と供え物を置き、上部はござなどで覆い、帽子をかぶせる。

⑭慈尊院

（九度山町慈尊院、2004 年 4 月、藤井撮影）

紀ノ川のほとりに建っている。慈尊院は空海の母親が居住したところで、母の没後、ここに廟を建て、弥勒菩薩を安置した。高野山の政所として重要な位置を占めていた。平安時代の高野参詣は、慈尊院から町石道を登ることが多かった。





⑩町石道

(九度山町慈尊院、2004 年 4 月、藤井撮影)

慈尊院から高野山まで、1 町ごとに町石が建てられている。この道は平安時代の貴族が高野山に参詣するときによく用いられた。



⑪急傾斜の畑

(高野町杖ヶ藪、2009 年 1 月、藤井撮影)

高野町には高野山を取り囲むように 19 の集落が点在している。こうした集落は宗教都市の高野山を支えていた。杖ヶ藪では位牌作りが盛んであった。



⑫炭の運搬 (再現)

(高野町上湯川、2011 年 2 月、藤井撮影)

湯川は炭焼きが盛んな集落で、昭和 30 年代までは高野山に炭を供給していた。



⑬杓子作り

(高野町東富貴、2011 年 2 月、藤井撮影)

杓子作りの職人は富貴に多かった。大正から昭和初期に、奈良県方面から移住してきたという。



⑩⑧ コウヤマキの畑

(高野町相ノ浦、2011年3月、藤井撮影)

コウヤマキは弘法大師のハナとして珍重されており、高野山では参詣者に販売する店や露店が多い。相ノ浦ではコウヤマキ栽培が盛んである。

⑩⑨ トウキの乾燥

(高野町東富貴、2010年1月、藤井撮影)

富貴ではトウキやビヤクシなどの薬草栽培がおこなわれている。



⑩⑪ マンボ

(高野町西富貴、2011年1月、藤井撮影)

富貴では家ごとにマンボという横穴を掘っており、そこにサトイモ・サツマイモ・ジャガイモなどを貯蔵した。

⑩⑫ ツクリゾメ

(高野町西郷(神谷)、2011年1月、藤井撮影)

和歌山県北部では、正月に田畑にサカキ・マツなどを立て、餅などを供えることをツクリゾメと呼んでいる。鍬で耕すところもある。





⑬⑨ 捕獲されたイノシシ

(高野町相ノ浦、2010年1月、藤井撮影)

⑬⑩ 的打ち

(高野町杖ヶ藪、2009年1月、藤井撮影)

杖ヶ藪の丹生神社では、1月3日にオコナイと的打ちをおこなう。般若心経を唱え、ゴウの札(牛玉宝印)を配ったあと、的打ちがおこなわれる。



⑬⑪ 鏡餅

(高野町西富貴、2010年1月、藤井撮影)

富貴では鏡餅の上に松を立てる家もある。

⑬⑫ 仏の橋

(高野町大滝、2009年8月14日、藤井撮影)

高野町の南部の集落では、盆に仏の橋と呼ばれるものを縁側の外に置くことが多い。これを伝って仏が家の中に入ってくるという。





①97 檀上加藍

(高野町高野山、2005 年 6 月、藤井撮影)

平安時代初期に空海によって開かれた真言密教の聖地。弘法大師信仰や高野山を浄土とする考えが広まり、貴族・武士だけでなく庶民まで高野山に納骨する習俗が普及した。写真は左から、御影堂、大塔、三鈷の松、金堂。

①98 青葉祭

(高野町高野山、1983 年 6 月、渡辺撮影)



①99 小辺路

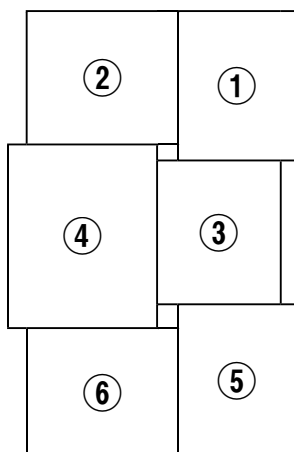
(高野町大滝、2009 年 8 月、藤井撮影)

大滝から小辺路を歩くと奈良県野迫川村に至る。
この道は熊野へと通じている。

②00 奥之院の施餓鬼棚

(高野町高野山、2008 年 8 月、藤井撮影)





表紙

①那智の火祭り

(那智勝浦町那智山、1972 年 7 月、渡辺撮影)

②水揚げされたカツオ

(串本町串本、2004 年 6 月、藤井撮影)

③クエ祭り

(日高町阿尾、2000 年 10 月 18 日、藤井撮影)

④みかん畑

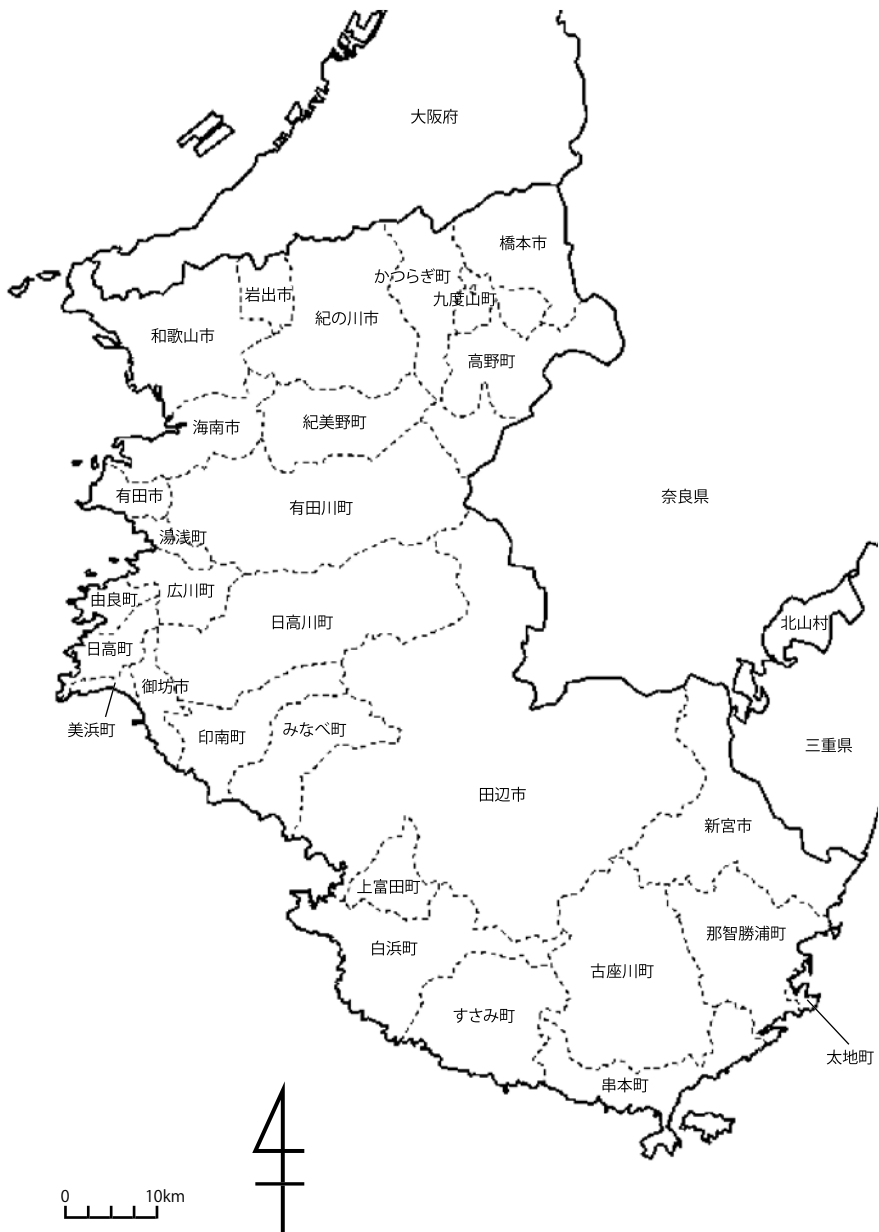
(海南市下津町梅田、2016 年 10 月、胡桃沢撮影)

⑤生石山麓の棚田

(紀美野町中田、2006 年 3 月、藤井撮影)

⑥慈尊院の乳房型絵馬

九度山町慈尊院、2007 年 3 月、藤井撮影)



表紙・口絵写真	和歌山県の民俗
---------	---------	-------

胡桃沢 勘司	網 伸也	藤 井 弘 章	渡 辺 良 正
--------	------	---------	---------

目 次

和歌山県の民俗

紀州の押送船
--------	-------

胡桃沢 勘司	1
--------	---

古代熊野信仰の原像を訪ねて
---------------	-------

網 伸也	37
------	----

高野山納骨習俗の地域差

——和歌山県北部を中心に——
----------------	-------

藤 井 弘 章	71
---------	----

近代和歌山における鉄道の開通と参詣への影響

——紀和鉄道の経営と高野参詣とを関わらせて——
-------------------------	-------

井 田 泰 人	217
---------	-----

延享元年、徳川宗直の御帰城と橋本町方
--------------------	-------

笠 原 正 夫	263
---------	-----

高野山周辺の御田——真国を中心に——	森本一彦	283
--------------------	------	-----

「御幡／布鉾／衣幣」考——紀州の祭りにみる古祭具のかたち——	蘇理剛志	305
--------------------------------	------	-----

村の牛玉宝印	坂本亮太	341
--------	------	-----

和歌山県紀美野町における動物の民俗	俵和馬	373
-------------------	-----	-----

書評と紹介

齊藤修著『環境の経済史——森林・市場・国家』	鈴木伸二	413
------------------------	------	-----

付録

民俗学研究所第二八回公開講演会

縁結び・縁切り習俗の現在（講演要旨）	松崎憲三	423
--------------------	------	-----

執筆者紹介		431
-------	--	-----

投稿規程		435
------	--	-----

和歌山県の民俗

書評と紹介

執筆 者 紹 介

— 生年・出身地・現職・著作 —

胡桃沢勘司（くるみさわ かんじ）一九五一年、長野県生まれ。近畿大学文芸学部教授・同民俗学研究所所長。『西日本庶民交易史の研究』（文献出版、二〇〇〇年）、『牛方・ボツカと海産物移入』（岩田書院、二〇〇八年）、『近世海運民俗史研究―逆流海上の道―』（芙蓉書房出版、二〇一二年）ほか。

網伸也（あみ のぶや）一九六三年、大阪府生まれ。

近畿大学文芸学部教授・同民俗学研究所所員。『平安京造営と古代律令国家』（塙書房、二〇一一年）、『経塚考古学論攷』（共著、岩田書院、二〇一一年）、『仁明朝史の研究―承和転換期とその周辺―』（共著、思文閣出版、二〇一一年）ほか。

藤井弘章（ふじい ひろあき）一九六九年、和歌山県生まれ。近畿大学文芸学部教授、同民俗学研究所所員。『熊野川町史 通史編』（共著、和歌山県新宮市、二〇〇八年）、『丹生都比売神社史』（共著、丹生都比売神社、二〇〇九年）、『人と動物の日本史』四（共著、中村生雄・三浦佑之編、吉川弘文館、二〇〇九年）、『高野町史 民俗編』（共著、高野町、二〇一二年）ほか。

井田泰人（いだ よしひと）一九六九年、大阪府生まれ。近畿大学短期大学教授。『大手化粧品メーカーの経営史的研究』（晃洋書房、二〇一二年）、『熱き男たちの鉄道物語』（共著、ブレーンセンター、二〇一二年）、『歴史に学ぶ経営学』（共著、学文社、二〇一三年）ほか。

笠原正夫（かさらは まさお）一九三四年、和歌山県生まれ。元鈴鹿国際大学講師、海南市文化財保護審議会委員長など。『近世漁村の史的研究——紀州の漁村を素材として——』（名著出版、一九九三年）、『紀州藩の政治と社会』（清文堂出版、二〇〇二年）、『近世熊野の民衆と地域社会』（清文堂出版、二〇一五年）、ほか。

森本一彦（もりもと かずひこ）一九六二年、和歌山県生まれ。高野山大学文学部人間学科准教授。『先祖祭祀と家の確立——「半檀家」から一家一寺へ』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）、『仏教寺院与家』（首藤明和・王向華・宋金文編『中日家族研究』浙江大学出版社、二〇一三年）、『前近代における僧侶の移動—金剛峯寺諸院家析負輯を中心として—』（『比較家族史研究』三一、二〇一六年）、ほか。

蘇理剛志（そりたけし）一九七六年、兵庫県生まれ。和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課副主査。「和歌山県の祭り」と信仰——傘鉾の祭りを中心に——（和歌山県文化

財研究会編『きのくに文化財』四六、二〇一三年）、『和歌祭鉾踊囃子方の復興について』（『和歌山地方史研究』六六、二〇一四年）、『紀州御坊祭にみる芸能文化の伝播と受容』（植木行宣・樋口昭編『民俗文化の伝播と受容』岩田書院、二〇一七年）、ほか。

坂本亮太（さかもと りょうた）一九七六年、神奈川県生まれ。和歌山県立博物館学芸員。和歌山県立博物館編『中世の村をあるく——紀美野町の歴史と文化——』（企画編集、和歌山県立博物館、二〇一一年）、『熊野水軍小山氏をめぐる資料』（『和歌山県立博物館研究紀要』二一、二〇一六年）、『文献資料からみる高野山への納骨』（『季刊考古学』一三四、二〇一六年）、ほか。

俵和馬（たわら かずま）一九九一年、兵庫県生まれ。生駒ふるさとミュージアム学芸員。「人とコウノトリの交渉史」（『文芸研究』一二、近畿大学大学院文芸学研究科、二〇一五年）。

鈴木伸二（すすき しんじ）一九六八年、大阪府に生まれ。近畿大学総合社会学部准教授・同民俗学研究所所員。「マングローブ湿地のシンプリフィケーション」（『近畿大学総合社会学部紀要』四（二）、二〇一五年）、「土地利用制度とガバナンス・ベトナム・カマウ省のマングローブ湿地の事例から」（『近畿大学大学院総合文化研究科・渾沌』一二、二〇一五年）、「開発フロンティアにおける資源管理とコンフリクト」（ポーリン・ケント・北原淳編『紛争解決―グローバル化・地域・文化』ミネルヴァ書房、二〇一〇年）、ほか。

松崎憲三（まつざき けんぞう）一九四七年、長野県生まれ。成城大学文芸学部（大学院文学研究科併任）教授・同民俗学研究所所長。『現代供養論考』（慶友社、二〇〇四年）、『ボックリ信仰―長寿と安楽往生祈願―』（慶友社、二〇〇七年）、『民俗信仰の位相』（岩田書院、二〇一六年）、ほか。

渡辺良正（わたなべ よしまさ）一九三三年、福岡県生まれ。毎日新聞東京本社出版写真部（一九六四―六六年）勤務後フリーとなり、日本国内の祭り、神事芸能、民俗芸能の取材に専念。現在、日本写真家協会会員、民俗芸能学会評議員。主たる写真集に、『椎葉神楽』（平河出版社、一九九六年）、『沖縄先島の世界』（木耳社、一九七二年）、『日本の祭り 山車と屋台』（サンケイ新聞社、一九八〇年）、など。

民俗文化 投稿規程 （平成二十二年十月）

一、投稿できる者は、近畿大学民俗学研究所々員および同所員より推薦を受けた者とする。

二、刷り上がりは、A五判・縦書き、一ページあたり五十一字×十九行を原則とする。原稿執筆にあたっては、できる限り、刷り上がりに合わせて字数設定を行うものとする。

三、投稿の締切日は、毎年二月末日とする。原稿は、原則として、電子記憶媒体（CD等）を添えて編集委員に提出する。

四、別刷は五十部を無料とする。

五、刊行後の報文（論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等）は、その著作権が近畿大学民俗学研究所に帰属する。ただし、著作者本人による転載等をさまたげるものではない。

六、刊行後の報文（論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等）は、冊子体以外の媒体（近畿大学学術情報リポジトリ等）で公開されることを承諾のうえ投稿

すること。ただし、電子媒体での公開に際しては、著作者本人もしくは話者の意向等により、一部または全部を非公開とすることがある。

近畿大学民俗学研究所

民 俗 文 化 第 29 号

平成 29 年 10 月 31 日印刷

平成 29 年 10 月 31 日発行

編集・発行者 近畿大学民俗学研究所

〒577-8502

東大阪市小若江3丁目4番1号

電 話 (06) 6721-2332

印 刷 所 近畿大学管理部用度課

